

# Eureka VI

六年制通信 No. 28 平成31年1月11日(金)号

## 正月の朝に考えたこと

昨年末から5年生の子たちと校長室で勉強をしています。迷える仔羊講座というやつです。別名、昼寝をする亀講座。それで年末に彼らとした約束通り、1月1日の朝7時に勉強を始めました。きっと彼らも机に向かっているだろうと信じて。

私の読んでいたのは恩師の小論集成で、忘れていたことも多く、時々辞書で確認しながら充実したひと時をもって、新年をスタートできました。彼らのおかげです。その後の正月休みは、始業式でも言いましたが福沢諭吉を読んだり、中倉清という剣道家の伝記を読んだりしていましたが、どれもけっこう面白かったなあ。

本を読みながら、読書の効用について考えていました。なぜ本を読んだ方がいいのか、生徒にこれをどう伝えたらいいのか。難しいところですよ。よく言われるのは、読書によって私たちは空間的（地理的）にも時間的にも隔たった人々の知恵に出会うことができるということです。これは誰も否定できないでしょう。例えば、今から二千五百年も前に遠く離れたギリシアに生まれた物語を私たちは読むことができます。千年も前に京都で書かれた日記を読むこともできる。こういった、先人たちの残した記録が今、私たちが求めれば読める。まず、このことが幸せですね。

ときどき、本を読むより実体験の方が何倍も大切だと言う人がいますが、そのことは、だからといって本を読まなくてもいいということには繋がりません。忘れがちですが、私たちの実体験はそんなに広くないのです。私たちが生涯出会う人の数は限られています。その中で親しく話をしたことのある人となると本当に少ないのではないのでしょうか。その人のことをよく知っているかとなると、ごくごく少数なのが普通ですよ。ですから、実は私たちは一生のうちで、ものすごい善やものすごい悪に出会うこともないのです。しかし、それらは人間の可能性として文学に描かれています。普通の人生では実体験できない人間の表裏です。それらは、美しいものでも醜いものでも全て本の中にあります。とすると、人間の厚みといったものを知ることが、読書を通してできるということです。実体験以上かもしれません。

人間の善から悪までを、人間の可能性として（実験的であっても）描く、文学はそのためにあると私は考えています。人間は単純ではない、もっと重厚なものであるという視点が文学にはあります。善を思いながら悪を為すこともあるし、悪人が善を施すこともある、そういった多くの物語を通して、私たちはそう単純に人間を割り切ることはできないことを知るので。現代の、私には一種の魔女狩りのようにさえ思える善悪のレッテル貼りや、一つのことで悪とみなした人物に対するオール悪という判

断を私は気持ち悪く見えています。

読書の際には気をつけなければいけないことがあります。例えば、諭吉の本などは現代に生きる私には納得できなかつたり、考えが偏狭に過ぎると思ったりするところが多いのですが、それは現代の目をもって昔を批判してしまっているのですね。これは戒めなければいけません。宣長も確か昔の本は昔の心で読まなければいけない、と言っています。諭吉の生きた時代を知って、彼の心持ちを理解しようとしなくては、言いたいことを誤解すると思います。進化論以降、新しいものが進化の頂点であると考えられすぎています。つまり現代人は昔の人よりも進化していると、何となく私たちは考えてしまうようです。これは全く違います。むしろ逆ではないかと思われるくらいです。世の中が便利になれば、それに比例して私たちの五感はやせていく。誰でしたか、そういった人がいましたが私もそう思います。時代も地域も自分から遠く離れた物語をたくさん読んで、特に若いうちに読んで、失われていく五感を研ぎ澄ませ、読書にはそういう一面もあるようです。

#### 今週のおすすめ

・バーナード・ショウ 『ピグマリオン (小田島恒志訳)』 (光文社古典新訳文庫)

映画「メリー・ポピンズ」の続編「メリー・ポピンズ リターンズ」ができたのですね。エミリー・ブラントの主演だそうです、今から楽しみです。1964年、それまでブロードウェイでミュージカル「マイ・フェア・レディ」の主演を勤めてきたジュリー・アンドリュースが初めて映画に出たのが「メリー・ポピンズ」でした。同じ年に「マイ・フェア・レディ」も映画化されたのですが、主演はオードリー・ヘップバーン。ここにジュリーvsオードリーという構図が出来上がったわけですが、オスカーはジュリーに与えられ、オードリーはしばらく立ち直れなかったと言われています。それはともかく両方とも実にいい映画ですから、是非観て下さいね。

この「マイ・フェア・レディ」には原作があって、ノーベル文学賞を受賞したバーナード・ショウの『ピグマリオン』がそれです。実はこの原作の名「ピグマリオン」を冠した映画もあるのですが（私も観ましたが）ヘップバーンの方が断然いいです。私の学生時代には確かショウの翻訳はなかったように思うのですが、今回いい訳が出ました。ただ、原作はエンディングがよろしくないですね。映画の方が圧倒的に美しく、洒落た終わり方をしています。皮肉屋のショウには、たぶん、あのエンディングは書けなかったのでしょう。

ギリシア神話によれば、ピグマリオンはキュプロスの王にして彫刻家。自ら美しい女の彫像を彫って、それに恋をする。後世、その女はガラテアと呼ばれています。そういえば、「アンドリューNDR114」という映画に女性のアンドロイドが出てきますが、確かガラテアという名前でした。「マイ・フェア・レディ」を観て、原作のタイトルが「ピグマリオン」だと知れば、また違った鑑賞ができるでしょう。映画も観て、原作も読んでみて下さい。いや、読んでから観た方がいいかな…。

BGMは朝倉さやの 木綿のハンカチーフ (山形弁) でした…。